

芽接ぎの詩集

(ENGRAFTED POEMS)

富田義介

序 詞

□ ちかごろ王子製紙の社長の中島慶治先生が「苗木を育てる」という面白い随筆を朝日新聞に寄せていました。その中にこんな事が書いてありました。

「イタリア北部を流れるポー河の沿岸にポプラが茂っている。イタリア・ポプラである。この木はおどろくほど成長が速い。種から苗木まで一年、山に植えて早ければ七、八年おそくとも十年で一人前になり、パルプの原木として利用できる。……ところでイタリア・ポプラは自然に生えたのではない。第二次世界大戦中、連合軍から封鎖を受けたイタリアは木材資源の枯渇に苦しんだ。そこでムソリーニは、成長の速い木材をつくり出すように研究を命じた。その結果生れてきたのでイタリア・ポプラ一五四号と呼ばれる木で、ムソリーニ・ポプラとも呼ばれている。その後さらに研究が進み、二一四号すなわちグロリア・ポプラがつくり出された。おかげでイタリアは、従来輸入に頼っていたパルプ材木をすっかり自給できるようになった。……だが、イタリア・ポプラは山に育ちにくい。ネズミやウサギにも食われやすい。そこで育種研究所では、傾斜地にも育つポプラ（ヤマナラシ）や、ネズミ、ウサギに強いポプラ（ドロノキ）を交配させて、イタリア・ポプラより適応性の広いポプラを育成した。」云々

□ 丁度そのとき、私は英文学（主として詩）の芽を切りとって、これを国語の台木に芽接ぎをし、国文学（主として俳句）の芽を切りとって、これを英語に括着させて、新しい而もすぐれた文学の品種を育てあげようとする仕事に夢中になっている最中でありましたから中島先生のこの文章をよんで、ひどく感服したばかりでなく、それまでよりも一層自分の現在

やっている仕事に生きがいを感じずようになりました。よって、その事をここに記して、中島先生に敬意と謝意を表したいと思います。

□ しかし、英語と国語において新種の文学の苗木を育てようとする私の夢が、果してうまく実現されるかどうかそれには、今後十分なる時を貸して、世評の定まるのを待つよりほかに手はなかり。けれども、この種の仕事が、作者の「ひとりよがり」または「ひとりじまん」に終始する怖れの多分にあることを私は十分に心得ている。それゆえ、私はすこぶる謙虚な姿勢をもって読者の方々の忌憚なき、しかしながら理解と同情のあるご批評を仰ぎたいものだと考えております。 以上

一九六四年三月

1

斑 雪

三月、雨に積雪破る
破れて、斑（はだら）の雪となり
退いて、山頭の巖に登る

註 □ これは William Wordsworth の “Written in March”（三月偶成）の中から次の4行をとって国語の台木に芽接ぎをしたのである。

“Like an army defeated
The snow hath retreated
And now doth fare ill
On the top of the bare hill.”

□ 筆者は、この芽つぎの詩を作りながら、しきりに詩聖杜甫の「国破れて山河在り。城春にして草木深し。」や道元禅師の「花は愛惜に散り、草は棄嫌に生ふるのみなり。」という言葉をごく自然に連想して居った。われわれは詩人と共に眼を凝らしてじっと大自然のいとなみを見ていると、

いかにも世間の無常迅速さがしみじみと自分の胸に迫って来る、がしかしながら、それと同時に大自然の美しさは、われわれの念頭から我欲我見 (the Ego-or Self-complex) の鬼を、たとえしばらくの間でも、物の見事に追ッ払ってくれる。鬼どもが退散すると彼等に代ってそこに現前するものは絶対者の荘嚴である。われらの魂は、その威儀にうたれて唯々その前にひれ伏すより外に道はない。最も純粹なる涙が最も純粹なる光を帯びて流れて落ちる。

「世間虚仮(に)」

唯仏是真」

というロゴスの妥当性は、その涙の光の中に始めて現前するであろう。そしてその瞬間にわれわれは絶対者から貴く生きる限りなき力と勇氣とを授かるであろう。百尺の竿頭に登って更に空中に進歩する勇力を授かるであろう。両手を以て千丈の絶壁に懸垂して更にその手を双(ふ)つながら撤し去る勇力を授かるであろう。それ故かくの如きのロゴス把持者であったワヅワッスの原詩は固より、

三月、雨に積雪破る

破れて、斑の雪となり

退いて、山頭の巖に登る

という筆者の芽つぎの詩と雖も決して単なる写実主義 (Realism) の詩として読過していただきたくない。そこで少しくどいようですが、このオペレーションをした時の私の氣持をありのままに此処に書いてみたまでです。

□ いや、そればかりではない。ドダイあなたも私も広い世間の誰も彼もが「世間虚仮、唯仏是真」

のロゴスを把持する仏教者と言えば、すぐにハムレット型のベシミストを想像していたのではないのでしょうか。とんでもない誤解でありました。彼等こそ竿頭に進歩しうる者、断崖に懸垂して更に双手を撤しうる者であった一と言うことを力説したいと思つたからである。

アン ヤラ
不動尊者

アシャラ (Acala) の劍^{つるぎ}、われに有り
 是故^{この}に、われ鬼を怖れず
 火焰のあらしを斬りて進み
 随處^{しう}に在りて主となる
 一劍天に倚りて寒し、^{あひ}吁

註 □ これは William E. Henley の “Invictus” という詩——特にそのなかの次の4行に発想して、筆者が制作したものである。

“It matters not how strait the gate,
 How charged with punishments the scroll,
 I am the master of my fate:
 I am the captain of my soul,”

□ この引用詩節第1行は Matthew 7.14に “strait is the gate and narrow is the way, which leadeth unto life.” (命にいたる門は狭く、その道は細い。) とある、その echo である。命とは固より永生のことである。

□ 第2行目の “the scroll” は、いわゆる「エンマ帳」で、われらが生前に悪いことをすると天使さまが高い処からチャンと見ていてその罪名とこれに対する天罰とを巻物形の手帳に記入なされるという民間信仰から思いついた言葉である。

□ 一たび、たましいの眼を開いて絶対者の荘嚴に触れた者は、これほどの勇氣と貴く生き抜く生命力とを授かることができる。それを Henley は “Invictus” と名づけているのである。アシャラ尊者とは、かくの如き勇力を得たる不退転の明王をいう。“Acala” は梵語で no budge すなわちビクともしないの意。この明王は火生三昧に入って一切の罪障を摧破し、

いささかも動揺しないからアシャラという。行者たちを護りたすけて、その修行を完遂させてくれる、いうなれば guardian saint である。アイルランドの常民にとりてのパトリック聖人さまに相当する。猛火を負うて右手に利剣，左手に繙索を持って，煩惱の火焰の海に溺れんとする者たちを救ける姿勢に描かれているのが普通である。

3

お も ひ で

池ありき
四つの鴨，これに浮ぶ
淡雪，いまだ消えやらず
草萌えて，池を囲み
空蒼くして，雲白し
幼き日，故里に見しこの景色
ああ，歳を経て忘れず
涙流れて，忘れず

註 □これは W. Allingham の “A Memory” という次に掲げる小品の，
いうなれば一芽つぎ (shield budding) である。

“Four ducks on a pond,
A grass bank beyond,
A blue sky of spring,
White clouds on the wing:
What a little thing
To remember for years—
To remember with tears !

□ 筆者がこの芽つぎのオペレーションをした時に，自分の頭の中には
故郷に帰った時

これではない

こんなものではない
自分が子供でみた世界は
山々だってこんなにみすぼらしく
低くはなかった
何もかもうつくしかった

という山村暮鳥の詩と、謝靈運の「池塘春草ヲ生ズ」という一句がひらめいていた事はたしかである。蕪村の「^{いかのぼり} 舳きのふの空のありどころ」という一句は、オペレーションがすんでから、追加的に想いだしたのではあるが、本当に涙がこぼれそうになった。筆者は、少年時代にそれほど舳揚げが好きであった、飯よりも好きであったから、今でもその状景が、いと鮮かに脳裏に蘇ってくる。

□ ところが、今ここまで書いてペンを置こうとすると、またもや杜甫の絶句と題する有名な詩をふと連想した。

江碧にして鳥^{いよいよ}逾々白く
山青くして花^も然えんと欲す
今春^{みすみす}看々又過ぐ
何れの日か是れ帰年

これも矢張深刻なノスタルジアの詩であるが、狭い門からはいて、永生への細道を命がけでとぼとぼと歩き続けた人の作品は、たとえこれっぽかりの小品でも、身ぶるいする程の迫力をもっている。おそらく四川にいて敗残の身に結核まで背負いこんでいた時分の作であろう。彼はそれから舟にのって長江を下り2年間さすらいの旅を続けて湖南に入り舟の中で世を慨き国を憂いながら59才を一期として死んだ。おそらく多量の咯血をして死んだのであろう。少稜先生の歩まれた苦難の道にくらべると、道元禅師——これも結核、おそらく咯血死——や芭蕉翁（これは疝氣もち、おそらく赤痢にて死亡）のそれは比べものにならない。少稜先生の作品に特有な

あのずっしりとした重量感は、そこから生れて来るのでは無かろうか。芭蕉が杜少陵の作品を愛読した——いや耽読したものだとの話は聞いている。すぐに芭蕉の俳句に触れようと思うので、杜甫の話ですこしく道草を食ったが、芭蕉には芭蕉特有の味がある。それはかれのカルミで、こればかりは杜甫には、いささか欠けている。しかし杜甫には杜甫の持ち味がある。それは禪家が

鉄樹花開く

劫外の春露

ということばで旨く、実に旨く表現しているあのきびしさである。ずっしりとした重量感、しかも鉄樹がちらほらと花をつけているみたいな艶やかさをのぞかせている。この点芭蕉のサビを以ってしても、等しくはならない。「江碧にして鳥逾々白く。山青くして花然えんと欲す。」と詠ずるあたりの、あの“*ex fors dulcissimo*”（力の中からのいとも甘美なるもの）とも名づけるべきあの旨^{うま}しさは、蕉翁のもち味ではない。少稜先生のあのもち味である。それは余韻とか余情とかサビとかシヨリとかいうことばでカバアすることは出来ない。モノノアワレでは猶さら物足りない。物足りないのは量の問題で、質ではない。わたくしの見たところでは、このズシリとくる力の量の点——オモミの点において蕉翁〔51才でなくなった詩人を蕉翁とはちと酷なようだが、これはこの句壇に対する敬称である〕には、杜甫の墨を摩する程の作品は、指をまげて数えるほどしかない。その余の名句はみな軽みの文学である。前者のエキザンプルとしては、「此秋は何で年奇る雲に鳥」と「むざんやな甲の下のきりぎりす」という句を挙げたい。それから後者のエキザンプルとしては……、これは余りにも多くあるから一寸選択に困るが、ひとまず「秋深き隣は何をする人ぞ」と「蛸壺やはかなき夢を夏の月」の二句を挙げておこう。これらの句にも後に言及するでありましょう。

(A MEMORY)

Kite, my kite
 I kept high —
 Ah, that high
 Yesterday !

註□ これは、蕪村の「凧きのふの空の有りどころ」という句を英語の台木に芽つきをしたつもりで、筆者は居るのであるが、果してそれが旨く活着するかどうか。

□ 読者のご参考までに、筆者が期待しているこの詩のよみ方、すなわち韻律をここにかかげて置きましょう。第2行目のトップの(1)を強く発声し“kept”を弱く読んで下さい。

| (×) ! | × ! |

| (×) ! | × ! |

| (×) ! | × ! |

| (×) ! | × ! |

The metre : 2, 2, 2, 2 stresses.

The rhythm : iambic.

□ こどものころ、自分は凧を制作すること、そしてそれを揚げるのが大好きで、友だちはみなとっくに凧あげを止めてしまった四月のころまでも、ひとり美しいゲンゲ田の中に立ちつくして春風に凧をとばすことがあった。風向きによって、ビリヨン神父の家の白い十字架の上方約数米の処に私の凧が背から夕陽の光を浴びながら独楽の澄むように殆ど空中に静止することがあった。そんな時「お夕飯よ、すぐ帰^{もど}りさいや」と家のものから呼ばれるまで、私はほれほれと自分の凧を見つめていた。「凧きのふの空の有りどころ」と蕪村が言うとき、彼は少年の日の自分に立ち帰って、「きのふ」と言っているのである。この「きのふ」は成人蕪村のきのふではない。少年の日の純真無垢なる魂の莊嚴にひき付けられて、わたく

しは少時くの間只礼讃のため息をつくのみであった。私のたましいは、この作品をとおして宇宙の全霊から活性エネルギーの給与を受けて、自ら変貌しつつあるのではないかとさえ疑われた。真にすぐれた文学というものは、こんな物かいなアと感じ入った。

□蕉村は世間の多くの句評家と同じように、芭蕉の風流の本領がサビ（寂）にあるものと誤解していたようである。それ故、蕉翁の風流の本領が寂しをりよりも、むしろカルミ（軽み）にあったことに気が付かず、「さとておろかなる身は、いかにして塵区をのがれん。としくれぬ笠着てわらじはきながら、片隅によりて此句を沈吟し侍れば、心もすみわたりて、かかる身にしあらはといと尊く、我ための摩訶止罽ともいふへし」（遺草）という風に芭蕉に対して一時は大層なひきめ——劣等感を感じていたものらしい。しかし彼はやがてその劣等感を清算し、自分の文学の本領がカルミ〔蕉村はもちろんこんな言葉を用いなかった。〕にあることを漠然とではあるが徐々に自覚して、「風流はしたはず」とか「寂しをりもはらとせんよりは」などとひとり言をいいだした。〔佐藤泰正著「蕉村と近代詩」pp. 15—17参照〕

□それから蕉村のいうなれば積み重ね方式による道元流の凡骨禪にも比すべき文学修業がはじまった。実は彼の師家である蕉翁がサビからカルミへ抜け出すために、彼の場合と全く同じ凡骨禪の文学修行にとりかかって居るのだが、与謝蕉村氏は全然ご存知なかった。蕉翁はその頃の感概を「ある時は仏籬祖室のとほそにいらむとせしも」（幻住庵ノ記）とか「僧に似て塵あり。俗に似て髪なし」（野洒紀行）とかいうさりげない言葉を用いてぼそぼそとつぶやいて居るから多くの人はこれが芭蕉のサビからカルミへ移行する重大なる転機を示すものであるとは全然気付かないで居る様子である。有名な芭蕉の研究家である志田先生ですら、このことを問題としながらもはっきりとしたご認識はなかったようである。〔志田義秀著「問題の点を主としたる芭蕉の伝記の研究」pp. 78—80参照〕蕉村が気

付かなかつたのも無理はない。

□カルミの句は生きとし生けるもの（all souls）就中市井の常民（common people）のひとりびとりの生活風景への物ふかい共感と愛情に発想して制作されるものであるが、作者は同時にすこぶる謙虚な態度で自分自身をも常民の中に投入して我執を離脱したその心頭風景を少しの虚飾もハッキリも無く小児のごとく無邪気に歌いあげてを、その本眞とするものであるから、俺は彼等の生活風景の観察者ではあるけれども“one of them”ではない、という様なエリート意識が有つては話には——いや詩にはならないのである。このような観点から考えて、蕉翁の後期に属する軽みの秀句と、蕪村の作品のなかでもその後期に属する次の二句

底のない桶あるくこけ歩行野分哉

。 罌きのふの空の有りどころ

を較べてみて、ひどく見劣りがするとは考えられない。芭蕉も蕪村も軽みへ脱けたすまではは相当の年期をいれて居る。いや脱けたしても蕪村が此処までくるにはぐしりぐしりと、粘りづよい文学修業をしたものと思われる。〔筆者は、本稿〆切の時日が切迫しているので、上記二句の制作年代をしかと調べえなかつた事を遺憾に思っている〕

5

Standing at gaze
Into the mackerel sky
Dotted with fowl
How I feel, O Death,
Thy approach !

註 □これは、芭蕉の名句「此秋は何で年奇る雲に鳥」の一芽接ぎである。芽つぎ師の自分が希望するこの詩のよみ方は

1 × ×	1 (×)	
1 × ×	1 × ×	1 (×) (×)
1 × ×	1 (×) (×)	
1 ×	1 ×	1 (×)
1 ×	1 (×)	

The metre : 2, 3, 2, 3, 2 stresses.

The rhythm : dactylic and trochaic.

□中国でも日本でも陰曆の八月に入ると、もうはっきりと秋声を聞くことができる。中唐の文人劉禹錫（772—842）の詩に

何れの処よりか秋風至る
 蕭々として雁群を送る
 朝来庭樹に入り
 孤客最も先づ聞く

全く読む者がその^{うま}旨しさに^{こた}耐えられない程、美しい詩である。正直にいうと、筆者は^{ぼうとく}夢得先生のこの詩をとおして、始めて「此秋は何で年奇る雲に鳥」という茫洋として捕捉し難い芭蕉の迷句を、名句として自分のたましいに受けとめることができた。私は夢得先生にお礼をいいたい気もちで一杯である。しかし先生は 1,120年以上も前に死なれて居る。まことに“ars longa vita brevis”の感が深い。本当に無常迅速の世間ではあるが、そこには^{せうじ}生死を超えて実在するものがある。不信者には「タシカニアルクミハミエヌカ」と電報をぶちたいくらい。

立秋になると、まず南瓜の葉がすがれてくる。^{つくつく}法師蟬が鳴きだす、蒼空高く北斎の版画にみるような穏かな鱗雲の波がかかることがよくある。やがてカリワタシ（雁渡）の風が「蕭々として雁群を送」ってくる。芭蕉の居たころの日本へは、雁のほかにはヒワ、ツグミなど沢山の渡り鳥が群をなして相次いで北の国から海を渡り、鱗雲の下を飛んできたものであろう。それが雁ならばヤアホン—ヤアホンと啼いて、かぎになり竿になりながら

飛んでくる。移りゆく季節の足音を「最も先づ聞く」風騒の人芭蕉がこのような風景に接した時、かれのたましい (Soul) は、自らの故郷^{ふるさと}である処の宇宙の全霊 “Over-soul” (エマアソン) に対して、したたかな郷愁を覚えたであろうこと、そしてその望郷の情をとげるためには一命をなげだしても構わないとまで思いつめたであろうことは、想像するに難くない。しかし、若しもそれは詩人特有のセンチメンタリズムというもので、むしろその病的心理に帰すべきであるとする批評家があったならば、それこそとんでもない大間違で、時々このように強烈な魂のノスタルジアを切実に覚えるのが人間の常道であって、さような経験をもたない者こそ人間のくず “cuss” (米語) である。何となれば、われらの個霊は、つねに全霊との冥合によってのみ、その生死を超えて生きる力——原子核エネルギーのようにトテツもない大きな生命力を補給されて居るからである。それ故すぐれた作品はソオルとオオバア・ソオルとをつなぐパイプラインの様な物である。

□おおよそ、すぐれた文学〔大力の文学と私という〕と称されるものに単なるリアリズムの文学などというものは、ひとつも無い。花は可愛いからちぎって来て瓶にさす、草の奴はよくないいやらしいから引っこぬいて棄てる程度の自然及び人生の受けとめ方では、いくら克明に写実をしても、それでは文学にならない。大力の文学にはなおさら程遠い。われらは須く^{まなこ}霊の眼をもって現象の背後にある尽くことなきの生命力を徹見しなければならぬ。またしても、私はマタイによる福音書7.13-14を引用しなければならぬ。

「狭い門からはいれ、滅びにいたる門は大きく、その道は広い。そしてそこからはいって行く者が多い。命にいたる門は狭く、その道は細い。そしてそれを見いだす者が少ない」

キリスト者だけではない。凡そ文学の事にたずさわる人は批評家であると作家であろうと、このロゴスを馬耳東風と聞き捨てにしてはなるまい。

(DOGEN'S REQUIEM)

For fifty-four years, yes,
 I've lit my soul, indeed,
 With Empyrean Fire.
 Being one with "space
 And milliard souls"—yes,
 Being free from self and pelf,
 Should die no death myself
 Though I expire.

註口これは、1253年（建長五年）に54歳を一期として入寂した、わが国における曹洞宗の開祖、希玄道元の遺偈として伝えられる次のことばの英語への芽つぎの詩である。

五十四年，第一天を照す
 箇ばいつちようの躡跳そくはを打し
 大千そくはを触破す
 賦いい，渾身じやく著する処なし
 活きながら，黄泉おうせんに陥る

× !	× !	× !
× !	× !	(×) !
× !	× !	× !
× !	× !	
× !	× !	(×) !
× !	× !	× !
× !	× !	× !
× !	× !	

The metre: 3, 3, 3, 2, 3, 3, 3, 2, stresses. The rhythm: iambic.

このような韻律で、上の英詩を朗読していただきたい。

□仏性伝東国師はわずか54年の短い生涯ではあったが、^{しかんだぎ}只管打坐して「万物は代謝有れども、九天は朽摧すること無し」（寒山詩）と徹見し、不滅の燈を万代にかかげた。内大臣久我通親の子希玄は死んだ、けれども仏性伝東国師は活きながら地下の「黄泉」(the Yellow Fountain or Fountain of Youth) に浴した。そうして不生不死なる永生を得た。国師は今なお

もも
百たる槻が枝は
ほつえ あめ
上枝は天を覆へり
あつま
中つ枝は東を覆へり
下つ枝はひなを覆へり

と古事記にしろされている Ygdrasil の樹蔭から、れわわれに向って

rupam sunyatā
sunyatā rūpam
色即是空
空即是色

の真理を呼びかけている。そして国師は世のきわみまで呼びわたるであろう。〔色即是空。空即是色。は玄奘法師の不朽の名訳〕

□「第一天」とは九天（回教では七天）の中の第一天で“the heaven of heavens”または“Empyrean”と呼ばれているもの、字典には region of pure lightと註釈してある。

「箇の跣跡を打し」は I have done away with all irregularities of the Ego- or self-complex という程の意。

□「大千」とは、三千大千または大千世界というに等しい。筆者は、これを“Space and milliard souls”という形で英語に移している。けれど、space = time and space ; (時空) ; milliard = 三千, 大千, 即ち英語の thousand millionで3,000ではない。souls = existences (実存) である。「大千を触破す」という言葉の裏には亦禪師の物深い人間愛がひそんでい

る事を看過してはならない。「触破す」とは My soul have come in intimate contact with, and merged thoroughly in, the Over-soul or the Lord (Buddha) or the space and milliard souls, という程の意。触破の「破」が上記の“intimate”乃至“thoroughly”に相当する。

□筆者の“……or the Lord (Buddha) or……”といった風なルーズな言葉使いに眼角をたてて野良犬に対抗する家猫のような高姿勢をおとりの方が、もしも今日被坐ったならば、昔ユダヤ人たちがエホバはもっぱら俺たちの神で、異邦人どもの神ではないと頑強に主張して口角泡をとばした事実を思いだしていただきたい。馬を指して鹿だという馬鹿の天は果してどちらであろうか。ドダイ、絶対者にエホバだとかザ・ロオドとかブツダとかアラアだとか思い思いの名前をくっつけてその意味を限定しようとするから、自縄自縛に陥ちいろうと云うもので、それよりか「三千」とか「大千」とか「三千大千」とか云って無限大を意味することばを用いた方がよっぽどましだと私は思う。しかし、それよりもっとましなことが有る。それは、さような議論をするひまが有ったら、じかに絶対者に触れる——大千を触破する工夫をするために、そのヒマをつぶすことである。このような工夫を刻々に積みあげて次第に近づく〔この積み重ね方式が禪師のいう只管打坐である〕であろう処のものが、キリスト者のいう“Highest Wisdom”（ミルトン）仏教者のいう“anuttara-samyak-sambodhi”（梵語）すなわち無上正遍智で、ここに至れば兎角の議論は雲霧消散するであろう。だからキリスト者には黙って祈れ、仏教者には黙って念仏せよと実は云いたい処である。大力の文学作品のひとつひとつを取りあげて、これを鑑賞することもたしかに積み重ね方式による絶対者へのアプローチのひとつの手段——否々最も有効適切な手段である。

□「渾身著する処なし」に対して“Being free from self and pelf”と当てた。self = the Ego or Self-complex, 我見, 我欲または我執 pelf = money or riches, thought of as bad or degrading 名利の利で

ある。芽つぎ師の私にこの語を思い付かせたのは、道元の次のことばであった。

学道の人はずべからく貧なるべし

財多ければ必ずその志を失う。

その上self と pelfがまことに旨くinternal rhyme を形成するからであった。

- 「黄泉」の黄は of a bright golden color の意。黄泉は大地の底深く在る金明水、これに浴する者は永生を得るとの民間信仰は世界的なものである。わが国には北伝の説話と南伝の説話と二つの黄泉説話がある。北伝のものは前に^{きき}少しく触れた。南伝のものは常世の国（常夜の国）の天津真名井。その辺^{ほとり}にあるユツカツラの樹が北伝の Ygdrasil すなわちモモエノツキの樹に当る。永生を得る云々のことは民間説話の浦島太郎伝説の中にもとけこんでいる。ここでは詳説できないから、これ位にしておく。しかし(イ)悉達太子が成道の際にマヤ夫人の姉すなわち太子の養母に当るマハプラジャパテが^{こんるわうじきえ}「金縷黄色衣」を太子に与えてその成道を祝したこと、(ロ)ヨーロッパの紋章故実では Yellow はloveとconstancyとwisdomを示すとしていること等から^{およ}約そ黄泉の「黄」が民間信仰において有っている言葉の匂いがほぼわかるであろう。

7

(BASHO'S REQUIEM)

Lying ill at inn

How I dream I'm wandering

On through frost o'er hill and dale !

註□これは期せずして芭蕉翁の辞世句となって了った、

旅に病て 夢は枯野を かけ廻る

という名句のシールド・バッディングである。道元の遺偈のきびしさ、力ぶよさに較べて、これは亦何という柔らかさ、しなやかさであろう。しかしその柔軟性のなかには生死を超えたる者の厳然とした威儀すじがねの筋金すじがねが一本通って居る。そのやわらかさと、やさしさと、一本通ったスジガネの強さとを英語の台木にうつすために芽つき師の私のなしたる苦心は少々ではなかった。しかしこの苦心が自分にとっては祈りである。念仏である、只管打坐であると心得て、敢えて驚馬に管打って、わたくしは芽つき師のしごとをこつこつと続けた。

驥は一日にして千里なれども

驚馬十駕すれば則ち亦之に及ぶ

という筈子のことばを思い出さし打ちこんだ。そして「ははア、これが道元禪の真骨頭だ、凡骨の積み重ね方式的努力がナッ。これが只管打坐というもんじゃワイ。」とさとした。いや、さとしたなど言う大げさなものではない。気がついたのだ。涙が眼ににじんだ。ここまで来て、わたくしは、はじめて芭蕉のサビやカルミが少しわかりかけて来たように思った。それは自然及び人生にたいする彼の心の受けとめ方、いうなれば彼の姿勢である。自然に対してはサビ、人生あるいは世間に対してはカルミの姿勢でこの人は生きていこうと考えたので、詩人の場合はサビの姿勢がやや早期に決定され、世間に対するカルミの姿勢ややが較々後期に決定されている。しかしこの二つの姿勢は決してバラバラなものではなく統一体である。

□自然及び人生において見る無常迅速なるもろもろの現象のうちに実在する、いうなれば永遠なる生命力、「国破れて山河在り。城春にして草木深し」と少陵先生が歌いあげた尽くることなきあの生命力に対する、やるせない程の思慕の情、すなわち魂のノスタルジアの上に立脚する姿勢で、双つながらあるけれど、カルミの方は、その烟のような現象の中でも特にタマシイ (souls) という現象のひとつびとつあらのうらに露あらわれた絶対者の相すがたへの深穩なる愛情すなわち個別的な愛情 personal affection の方へより

傾斜した時の詩人の姿勢である。

□芭蕉の句は、生きとし生けるもの“all souls”へのこのふかいpersonal affection を周到緻密な用語をもって表現した軽みの句にすぐれたものが多い。杜甫のオモミ（重み）の詩がこれと面白いコントラストをなしている。杜甫は自然を觀ても人生を觀ても必ずその全体への考察をすることを忘れない。ひとつびとつを考察しても、その後で全体へのコレクティブな考察——religious generalizationを加えて大きな力強い感慨にうたれる。だから憂国慨世の詩が多い。読者は試みに

白馬東北より来る
空鞍に雙つながら箭を貫く
憐れむ可し馬上の郎
意気今や誰か見ん
近時主將戮せらる
中夜商於の戦
喪乱死するもの門多し
嗚呼涕霰の如し

という杜甫の詩と

秋深き隣は何をする人ぞ
蛸壺やはかなき夢を夏の月

という芭蕉の傑作の二つを較べて考えてごらん下さい。オモミの文学とカ
ルミの文学とのちがいが良くおわかりになるでしょう。

□上掲の杜甫の詩を見てみましょう。もしもこの詩が第1行から第5行
までのものだったら、それはリアリズムの——いやもっと上昇してインプ
レッションニズムの詩として最高のものでしょう。空鞍だから馬上の郎はも
はやそこに居ない、居ない馬上の郎を捉えて「憐れむ可し馬上の郎。意気
今や誰が見ん」というあたり確かに単なる写実の詩ではない。印象派の詩
としても最高である。しかし杜甫の本領は更に第5行以下の四行を加えて

無常迅速な色即ち rūpam のうらに唯仏是真を空 (sūnyatā) を、観ずること、ふかぶかとした religious generalization を試みることを、忘れていない処にある。そして「嗚呼涕霰の如し」と大力の感慨を沈吟している処にある。杜詩に見るこのオモミは、要するに、詩人の不動不退転な「上求菩提」の姿勢に因由するものだと筆者は考える。

□わたくしは、この頃アシャラ尊者の中に杜少陵先生の悲痛な姿を見るようになった。アシャラ尊者の尊像を見てみよう。左眼をほそく閉じてござるのは、米も銭も持たない信者の布施のみで辛うじて生きてござる尊者がその貧苦をじっと耐えている気持を表わしたものの。下の歯で上唇を噛んでござるのは「衰年肺を病んでただ枕を高うす」〔枕を高うしなければ咯血しそうな杜甫で恐らくあったろう〕と苦吟した杜甫と同じように、じっと病苦を耐らえて居る心相を表現したもの。火焰を負いながら右手に利剣を拵じてござるのは衆生のためにその猛火の如き煩惱を断ぜんとする勇猛心〔人類の罪を負うてのキリストの受難の勇気を想え〕を示すもの。また左手に繯索を持ってござるのは、その罪のために苦海に溺没せんとして居る衆生のからだにあの綱を結びつけて救い出そうとする大慈悲心〔クルスに架かる前のキリストの心情を想え〕を示すもの。と私は見る。お不動さん、お不動さんと云うて、ばかにこの尊者に人気があるのは、そこなのだ。常民は「鉄樹花開く劫外の春。露。」と禪家がいう truth をお不動様の忿怒の相から、その肌で感じ取って居るからである。キリスト者の常民は耶蘇の頭に荊の冠を着せて、荊の刺にさされて流れでる耶蘇の血の温さから「鉄樹花開く劫外の春」即ち神の mercy をその肌で感じとっている。貧苦に或は病苦に或は不運に、災難に責めさいなまれた人間ほどひしひしと魂にしみわたる人間苦を——世界苦を、Welt-schmerz を、そうして遂には weariness of life をさえ感じるものはない。いや、死ぬことをさえ想う。旧聖書のヨブ記ほどその人間苦を訴えた詩は、ざらには無からう。またしても道草を食うことになるが、私はヨブ記 3.17—18に

かしこでは悪人も、あばれることをやめ
うみ疲れた者も、休みを得、
捕われ人も共に安らかにおり、
追い使う者の声を聞かない。

とあるのに発想して次の芽つぎの詩を英語でつくってみた。しかし余りよい手際だとは思わない。

Down there the wicked cease
From troubling workers and
The workers, dead, shall cease
To shed their sweat on sand.

□かくのごとく、理屈に合わぬわが身の不仕合せをよよと泣きわめいて
辛^{わず}かに得た鉄樹花開く劫外の春がヨブの場合には **the merey of God Almighty** であった。絶対者はとてもきびしいもの、これを甘く見る詩人には決してその姿は見えない。見えないからヨブのような、ミルトンのような、杜甫のような、又芭蕉のような、蕪村のようなすぐれた詩人にはなれない。詩人になれないだけなら、まだしも、絶対者からさかんにピンタを張られる、何だかわけの分らぬピンタだから、眼を白黒にして左の頬をさすって居ると、馬鹿野郎とぼくるなアと云わぬばかりに、こんどは右の頬の上に強烈なピンタをはられる。運が悪いんだ！とつぶやきながら、おなごの事など考えてウロチョロして居ると、ぼやぼやするなアと大喝されて背なかにしたたかな痛棒をくらう。こんどは殆ど人事不省になりながらも、魂の神経にジインと滲みわたる何ものかを感じて「はい、わかりました。有りがとさんでござんす」と心中につぶやいた瞬間仄かな回心の曙がやってくる。マルチン・ルーテルの場合には彼が父親の命令で法律学の修士コース(?)に居た時分友達の一人与の外出中に大雷雨に会い友人は雷に撃たれて死んだ。彼も一緒に撃たれて死んだが、間もなく息を吹きかえした。このことが天の下した大痛棒となり、その後間もなく吾々は法律学を捨てて聖書文学のドイツ語の台木へのつぎ木の仕事に没頭する彼を見いだすの

である。松尾芭蕉の場合この痛棒はおそらく天和二和（1682）の江戸の火事で折角住みついた芭蕉庵から焼き出された事であったろう。その時は江戸の人たちから振袖火事（1657）の出火の原因にからまる妖怪な因縁話やあらかた江戸の街を全焼した明暦の怪火の身の毛のよ立つばかりに怖ろしかった話など聞いたに相違ない。私は、志田先生とちがって芭蕉庵というちっぼけな住居が類焼した事より、つぎつぎに起った江戸の火事がこの俳聖に与えた精神的なショックの方を重視する。それが彼をして空を覗ぜしむるの動機となり、われらみな夢幻のなかに住むなりとの感をひとしお深くせしめ、それが上求菩提にアクセントを置いた決道者の姿勢を、下化衆生しゆじようにアクセントを置いた詩人の姿勢に切り換えしめるに至った機縁となったものと見なくてはなるまい。と私は言いたいのである。

□それからもう一つは、わずか 17 syllables をもって物深い宗教的な感情を表現するべく要請されて居る俳句作者は、漢詩や英詩の作者とちがって、サビやオモミの詩はとても窮屈でシラブルの絶対数において不足を感じる。杜甫のように **religious generalization** を以て荘重な締めくくりをすることなどは、無い袖は振れぬから、到底できっこ無い相談である。勢い、カルミに転向してより自由な活動の天地を求めるより外に手はないのである。このことは蕪村の制作心理の経過を追うて見るとよく分る。しかし、上求菩提の求道者的な真摯な努力なくしては、下化衆生の大任は果せないから、凡そ句作者は「寂しをり」の句を制作する苦難の道を回避してはならない。永生に到る道は細い。そしてこの道を行くものは少い。この道や行く人なしに秋の暮である。俺は詩人だ、学道の人ではないと言って背なかを高くする者は到底すぐれた詩人にはなれない。

□さてきて、私は首題の句に立ち還って、この句が何故、魂の故郷である大自然のふところに帰投することを強力に希求するノスタルジアの死の本能まる出しの、サビの詩でありながら、杜詩ななどと全く違って、格別かくべつに柔らかな而も軽みのある格調を具えているのか？これを簡単に説明して、

一先ずこの稿をうちきりたいと思う。私の見る処によれば、これは作者が永年の自分という者も同例に入れての下化衆生のカルミの句作にうちこんだこと、随って「命根を断絶して大死一番する」覚悟はとっくの昔にできていたこと、が自ら此処にその効果を現わして居るのであって、夢はカレノヲといい、カケメグルという狂おしいほどに荒涼としたムードが、もしもこの句からひき去られたならば、それは「北上の川の岸辺にやはらかに柳青めり泣けとごとくに」という啄木のやわらかなノスタルジアの歌に数歩のところまで接近するであろうとさえ考えられる。この期に及んでは積年の風流の道すら「私の妄執といましめ給へる」事のように思われてならぬ、「生死の転変を前にをきながらほつ句すべきわざ」でもござるまい、と云ってこの句を門人たちに示してから四日目に芭蕉は51才を一期として母のふところに帰するが如く遷化している。「なをかけ廻る夢心地」という代案より最後の決定が余ッ程すぐれていることは云う迄もない。ばせを翁の耳にはその時しきりに the call of the death instinct が聞えていたのである。J. London の小説の主人公の名犬 Buck がしきりに “The Call of the Wild” (荒野の呼び声) を聞いたのと同じように。

□読者の方には次のような韻律をもってご朗読をねがいたい

1 ×	1 ×	1 (×)	
1 ×	1 ×	1 × ×	
1 ×	1 ×	1 ×	1 (×)

The metre: 3, 3, 4 stresses.

The rhythm: trochaic.

“through frost”は、^{はだえ}膚を刺すような寒風を衝いてという程の意味。

□“at inn”について。大阪御堂前花屋の離れは旅宿ではない。それを at inn とは？ご不審があらうかと思いますが、これはコトバの魔術師である詩人の特権で、杜甫も今の四川省の夔州で楊子江の濁流を望みながら「江へき碧にして……」とうたっている。